

南極OB会 会報

No. 15

発行 南極OB会
会長 川口貞男
編集 広報委員会

目 次

口絵写真 第1便（しらせ接岸断念）・1	
南極観測の新たな展開を求めて	
白石和行・・・2	
第53次南極地域観測隊壮行会開かる・・・3	
南極OB会主催・・・3	
南極地域観測統合推進本部主催・・・4	
第8回「南極歴史」講話会も開催	
南極観測幕開けの頃 中村純二・・・5	
白瀬南極探検100周年記念東京講演会	
「南極英雄の時代」の探検と白瀬南極	
探検・・・6	
「南極記」勉強会・・・7	
英訳「南極記」について・・・8	
南極関連情報・・・8	
極地研究所所長に白石和行氏、しらせ出	
港、53次観測隊出発、山地地学調査隊も	
出発、海鷹丸による観測も実施、「しらせ」	

難航・接岸断念	
「話題提供」TBS 特別番組「南極大陸」を	
見ましたか・・・9	
連載支部便り⑩（信州支部）	
「白瀬南極探検隊100周年記念講演会・	
展示会」に取り組んで・・・11	
連載支部便り⑪（山陰支部）	
白瀬南極探検100周年プロジェクト・・・12	
連載「帰国後の各隊の動き」	
第24次隊帰国後の活動報告・・・14	
新刊紹介	
小島敏男著「しらせ南極観測船と白瀬丸」	
・・・15	
会員の広場・・・16	
訃報	
広報委員会からのお知らせ・・・16	
事務局の案内・・・16	



12月23日昭和基地に届いた第1便受け入れの様子。青色ヤッケ52次隊、オレンジ色ヤッケ53次隊。なお、1月24日現在、「しらせ」接岸断念。氷上輸送と空輸が始まる。

南極観測の新たな展開を求めて

国立極地研究所所長 白石和行

南極OB会員の皆様、新年おめでとうございます。

昨年10月から、国立極地研究所長に就任いたしました。よろしくお願いいたします。



国立極地研究所新所長 白石和行氏

白瀬南極探検隊から100年を経て、一昨年から今年にかけて、白瀬中尉の出身地である秋田県にかほ市を中心にイベントが続いてきました。東京都立川市の国立極地研究所のキャンパス内にも白瀬隊の偉業を称えるモニュメントが、南緯80.5度の「やまとゆきはら」に到達した1月28日の記念日に向けて建てられます。

白瀬隊から45年の時を経て、日本の南極観測隊は昭和基地を建設し、第1次越冬隊による観測が開始されました。さらに55年を経て、現在は第53次隊と、越冬を終えた第52次隊がともに昭和基地で夏期観測、作業や野外活動に従事しています。

この100年間の社会の変化や技術の進歩には目を見張るものがあります。輸送ひとつをとってみても、白瀬隊のわずか200トン余りの開南丸と現在の観測船「しらせ」とでは比較のしようもありません。さらに今日では航空機による大陸間の輸送も現実のこととなっています。

私たちは、南極観測50周年と新「しらせ」就航を機会として、2008年に「新

たな南極観測のありかた」(注)のビジョンを描きました。これはラフなデッサンでしたが、今後の指向性を示しています。また、日本学術会議では今後10～20年を掛けて実施が期待される「学術の大型施設計画・大規模研究計画」をとりまとめようとしており、このなかに極域研究者が中心になって、「極域研究のフロンティア」と題して南極や北極の計画も盛り込もうと努力しています。その中のひとつが、「南極内陸総合観測計画」です。

南極大陸の内陸地域の越冬基地は、極点(米)、ボストーク(露)、コンコルディア(ドームC、仏・伊)のわずか3基地にすぎず、夏の基地としては、ドームふじの他には、ドームA(中国)とコーネン基地(独)が存在するのみです。しかし、この内陸部、特にドームふじのような表面地形の高まりでは、70～100万年にも達する古い氷床氷が採取できるだけでなく、上層の大気や超高層、さらには天文観測にとってたいへん重要な基地になることがわかっています。この計画では、さらに、氷床下の基盤地質や生物、氷床中の生命活動など、大気から氷床下の岩盤までの鉛直方向や周辺地域を含めた面的な観測を展開して地球惑星科学の新展開をはかろうとするものです。

しかし、これらの研究や観測をおこなうためには、なによりも内陸への物資輸送力を確保しなければなりません。その上で、新たなドームふじ基地を建設する必要があります。

ロジスティクスの力がすべての活動を規制します。現在進められている無人走行トラクターの開発はその一環ですし、航空力はいっと活用されるべきでしょう。そして、新たな内陸基地の設計の構想にも着手しました。

昭和基地の充実もまた大課題です。ご存じのように、昭和基地は建設の止むことのない基地です。次々と計画される研究や観測に対応するための施設の建設と、一定数の隊員が安全に生活し、安定した観測や研

究ができるインフラストラクチャとしての基地機能の充実が課題です。

しかし、これは容易なことではありません。最近のリュツォ・ホルム湾の氷状は厳しく、世界最新鋭の観測船「しらせ」をもってしても接岸の保証はありません。現に、現時点（1月11日）で、まだ昭和基地まで25マイルの地点で苦闘しています。こうした氷状もいつかは好転するでしょうが、むしろ虚心に、厚い定着氷を進まなければ到達できない位置にある昭和基地をどのように維持経営すべきかということを考えねばなりません。

一方で、「まだ、南極観測を続けているのか」、「南極観測を50年以上も続けていて、まだやることがあるのか」とか、「南極観測をやって何の意味があるのか」といった声も聞くことがあります。スポンサーである国民に南極観測の意味をしっかりと伝えてこなかったのではないかという反省とともに、

日本が南極観測を国家事業として継続していくことの重要性をしっかりと伝えることには、現実に従事しているわれわれはもちろんですが、南極OB会の皆様のご協力を仰いで地道に続けたいと思います。

立川キャンパスに設置した「南極・北極科学館」には、そうした目的の中心となる拠点としての役割があります。さいわい好評を得て、一昨年夏の開館以来、1年半ですでに4,600人もの入館者を得ました。この科学館の運営の一部についてはすでにOBの皆様からご助力をいただいています。さらなる助言やご協力をお願いいたします。

本稿は南極OB会報の記事ですので、南極に限って記しましたが、国立極地研究所は名前が示す通り、北極も重要な研究対象です。南北両極を等しく研究することによって、地球惑星の歴史と営みを明らかにする道筋をたどっていきたいと思っています。

(注)「新たな南極地域観測事業のあり方—新観測船時代のビジョン—」は、
http://www.nipr.ac.jp/jare/topics/shinsedai_houkoku_ver20080626.pdf
を参照ください。



第53次南極地域観測隊壮行会開かる

南極OB会主催による、第53次南極観測隊の壮行会が平成23年11月2日（水）の夕刻より開催された。場所は東京都千代田区竹橋の「パレスサイドビル」9階レストラン「アラスカ」。出席者は会員約60名、第53次隊約45名、概ね105名ほどであった。

壮行会に先駆けて、白瀬南極探検100周年記念事業委員会が編集したドキュメント映像「白瀬南極探検隊の記録（仮題）」を渡邊興亜氏による解説で上映し、後ほど第53次隊に贈呈した。なお、この映像は再編集されて2月25日の公開講演会で再上映される。

壮行会は神田OB会運営委員長の開会宣

言に次いで、渡邊研太郎氏の司会で進められた。川口会長、谷垣自民党総裁、白石極地研所長の挨拶に次いで楠氏の乾杯と進み、その後、あちこちで無事の帰国を願って懇談した。

一段落したところで、山岸第53次観測隊長、石澤越冬隊長による挨拶や事業計画などのお話をいただいた。そして恒例の新隊員の自己紹介では、和やかなやり取りを交えながら楽しいひと時をすごした。

最後に川口会長より第53次隊へドキュメント映像の贈呈と関谷会員（会友）より「しらせ」の絵が贈呈されて終了した。

以下に当日の様子のスナップ写真を掲載する。



司会 渡邊氏



観測隊長 山岸氏挨拶



越冬隊長 石澤氏挨拶



以上9葉の写真は第53次隊員による自己紹介スナップ



ドキュメントの贈呈



関谷会友からの絵の贈呈



会場風景

推進本部の壮行会開催

また、南極地域観測統合推進本部（本部長：中川正春文部科学大臣）主催の第53次南極観測隊並びに「しらせ」乗員の壮行会が、11月10日（木）午後5時半から、

東京・港区元赤坂の明治記念館「富士の間」で開催された。観測隊は山岸久雄隊長らが、「しらせ」側は中藤琢雄艦長以下幹部がそれぞれ参加した。



第8回「南極の歴史」講話会

(2011年10月22日(土) 14:00~16:00 日本大学理工学部)

「南極探検裏話」

南極観測幕開けの頃

中村純二

(1S、2S、3W、東大名誉教授)



講演する中村純二氏

第1回国際地球観測年(IGY)は1882~83年に、第2回IGYは50年後の1932~33年に実施され、わが国も第2回には参加した。

その後、科学の進歩は著しく、11年周期の太陽活動、従ってオーロラ出現率も、1957年頃極大になると思われたので、IGY委員会では第3回を前回の25年後に当たる1957~58年に行うことを決め、今回は特に南極大陸での各国の協同観測を重視することとなった。

1955年に入ると、日本学術会議内でも、是非参加したいとの声が高まり、朝日新聞も1億円を醸出して後援を申し入れてきた。

日本学術会議の茅誠司議長は、大戦終了後未だ低調だった国民の志気を昂める為にも、わが国の科学水準の高さを示す為にも、この際日本製の観測船や機器を準備して、

南極観測を是非実現したいと考えていた。

白瀬中尉の南極探検に関心の深かった松村謙三文相もこれに賛同し、茲に国家事業としての南極計画案が纏まった。

同年9月ブリュッセルで開かれたIGY委員会には、学術会議の長谷川・永田両委員が出席、以下の案を説明して、全員一致の承認を得たが、日本に割り当てられた観測地点は、東経30度付近の前人未到の厳しい大陸海岸であった。

このためわが国は、一年早く'56年に予備観測隊を送って、設営準備や本観測のための偵察を行い、'57年に本観測隊を出すことに決まった。

観測部門は気象、地磁気、極光・夜光、電離層、宇宙線、地震、地理、海洋等、設営部門は建築、機械、航空、医学、通信、食糧、装備、犬等の各学会が協力、観測船は海上保安庁に委嘱して宗谷を改装し、念のため随伴船として東京水産大学の海鷹丸に同行して貰うことも決まった。

この間、マスコミの協力は、国民、特に小中高校生にまで大きな影響を及ぼし、寄付金なども次々に申し込まれて、事業は大いに盛り上がった。中でも朝日新聞社は援助金や濤沸湖訓練への協力、宗谷へのセスナ機の貸与等、貢献度が大きかった。

時期は相前後するが、最終的には次の組織と体制が固まった。南極地域観測統合推進本部(松村本部長)、日本学術会議内の南極特別委員会(茅委員長)、寄付金凡ての受け入れ機関は日本学術振興会となった。そ

して観測隊長に永田武教授、設営総括の副隊長に西堀栄三郎博士、宗谷船長に松本満次海上保安官が夫々決定した。



第1次隊の西オングル島昭和平での上陸式後、大陸を臨む羊背岩上にて。左より西堀越冬隊長、中村、田英夫共同通信記者。(撮影 林田重男カメラマン)

第1次予備観測隊の出航は11月8日と決まったが、それまでの期間は数ヶ月しかなく、特に設営部門では連日午前様となる忙しさであった。特に宗谷の砕氷能力1メートルへの改装は大変で、日本鋼管浅野ドックでの夜を日についでの関係者の奮闘には頭の下がる思いであった。宗谷のレーダーは米国製、クロノメーターはスイス製で

あったが、この辺りが当時の日本の限界であった。

観測隊員には観測と同時に、設営の経験や知識も要求されるので、東大、京大、北大等の山岳部OBが多く選ばれたが、観測遂行の為には、それ以外の大学や研究所も必要であり、更に各メーカーから報道、芦峠寺四人衆に至るまで、全員の尽力が必要であった。

更に宗谷や海鷹丸船員の協力や、中でもビセット時の献身的な努力も不可欠で、結局参加者全員の積極的な協力により、この大きな事業は実績を残したものであり、その後の南極観測に繋いで行くことも出来たと考えられる。宗谷時代の南極観測に取り組んだ多くの方々に改めて感謝の意を表するものである。

最後に次のスライドを上映した。

- 暴風圏や氷塊に挑んだ第1次の宗谷
- 第3次の際、生きていたタロとジロ。
- タロ・ジロ等とともに出かけた20日間の小型犬橇旅行(中村・平山)
- オーロラ帯直下で観測された活発なオーロラや赤いオーロラ(1959年は百数十年間で太陽活動最大の年であった)。



白瀬南極探険100周年記念東京講演会

「南極英雄の時代」の探検と白瀬南極探検

100年前の1911年12月14日、ノルウェーのアムンゼン隊が人類最初の南極点到達を果たしました。遅れること1ヶ月、1912年1月16日に英国のスコット隊も南極点に達しましたが、ロス島の根拠地への帰還を果すことはできませんでした。その頃、ロス海東側の鯨湾を出発した白瀬隊は1912年1月28日に南緯80度付近の地点まで南進し、その地を「大和雪原」と命名しました。同じ頃、野村船長

に率いられる「開南丸」はエドワード七世ランドの沿岸を調査しつつ東に航海し、西経151度20分付近で行く手を群氷に阻まれたため鯨湾へ帰還、陸上隊を収容しています。

19世紀(1897-99)の終わりにはベルギー人が率いる国際隊がアムンゼン海-ベルングスハウゼン海でビセットされた「ベルジカ」号上で南極最初の越冬を余儀なくされます。この船にはアムンゼンが

航海士として乗り組んでおり、彼の南極点初到達の礎となる経験を積んでいます。また、この出来事は南極探検「英雄の時代」の幕開けでもありました。

今年2月25日（土）、26日（日）の二日間、東京神保町、一橋講堂（学術情報センター）にて、白瀬南極探検100周年を記念した講演会を開催いたします。25日は白瀬南極探検を中心に、「南極記」を英訳した英国探検史家による講演、開南丸船長から見た南極探検航海についての講演および白瀬南極探検から現在の日本南極観測への発展が日本人講師によって語られます。

26日の講演会は「南極探検英雄の時代の英雄達」をテーマに、当時、ロス棚氷か

ら極点に向った探検隊（英、ノルウェー）、「ベルジカ号」探検の関係者をお招きし、それぞれの探検の背景とその成果とともに、そうした探検が現代社会にどのように受けとめられているかを語ってもらう事を開催趣旨としています。

韓国極地研究所からも韓国南極観測で指導的役割を果たされた講師をお招きし、アジア人の立場から見た白瀬南極探検について語ってもらう予定です。

詳しくは、本号に同封されたパンフレットをお読みください。講演会は一般公開ですので、ご関心をお持ちの方々にお伝え願えれば幸いです。

（コンビーナー：渡邊興亜、神田啓史）

「南極記」勉強会（中間報告）

小野延雄

白瀬矗が帰国した翌年の暮（1913年12月）に、大隈重信が会長を務めた南極探検後援会が編纂した『南極記』は、白瀬南極探検隊の公式報告書である。この「南極記」を読み解いてみようとして勉強会を開いている。この勉強会の活動の中間報告を記す。

百年前、南半球の夏至の日よりも一週間ほど早い1911年12月14日に、アムンセン隊が南極点に初到達した。アムンセンが急いだ理由は、スコットに先んじたいことよりも、1912年の天測暦を持っていなかったもので、1911年の内に着かなければならない事情があったのだと伝えられている。シャクルトンが南極点まであと180キロの南緯88度23分で引き返したのが1909年1月9日、スコット隊が南極点に到達したのは1912年1月17日であった。その前日の16日に白瀬隊が南極大陸（ロス棚氷）に日本人として初上陸を成し遂げ、南緯80度05分まで進んで日章旗を掲げたのが28日と、皆、夏至を過ぎて南極の厳しい寒さが緩む1月の行動であった。

大隈重信が会長を務める南極探検後援会が編纂した『南極記』は、白瀬南極探検隊の公式報告書であり、帰国した翌年の暮（1913年12月）に成功雑誌社から発行された。南極OB会は、白瀬隊100周年を機に、南極の大先達である白瀬南極探

検隊の装備や足跡、諸外国隊との交流背景を学びたいと『南極記』勉強会（世話人：小野延雄）を立上げ、これまでに10回ほど開催した。開催場所は、OB会事務局あるいはゼロダテアートセンター（千代田区外神田6丁目／旧練成中学校舎）で、開催日、主な話題及び話題提供者は次の通りである。

第1回2010年12月17日

『南極探検船最南記録と鯨湾の位置づけ』小野延雄

第2回2011年3月5日

『南極記の動物』永延幹男・国分互彦

第3回2011年4月9日

『野村船長の航海日誌』宇都正太郎

第4回2011年5月14日

『白瀬隊持参の気象測器』松原廣司

第5回2011年6月4日

『白瀬記念館所蔵資料』石船清隆

第6回2011年7月9日

『続・白瀬記念館資料』石船清隆

第7回2011年8月13日

『南極記英訳本出版関連』楠宏

第8回2011年9月3日

『日付変更線通過記述』小野延雄

第9回2011年10月29日

『樺太犬及び犬橇』小野延雄

第10回2011年12月3日

『極地研所蔵白瀬南極探検関係資料』神

田啓史

毎回、新知見や関連話題が提供され、議論が白熱することも多い。

今後も何回か継続する予定で、来年度中には冊子として印刷することを考えている。

☆☆☆☆☆☆☆☆

英訳「南極記」について

このたび、白瀬矗の功績を記述した「南極記」が、アメリカ在住スコット極地研究所のヒラリーシバタ (Hilary Shibata) 氏により英訳され、出版された。ヒラリーシバタ氏には2月25日(土)の国際講演会「南極探検時代の英雄たち」の中の「南極記の英訳—ヨーロッパからみた白瀬南極探検隊」で講演をいただくことになっている。アムンゼンやスコットが活躍した同時代の白瀬矗を世界に知ってもらうためにも、機を得た英訳「南極記」である。この「南極記」をOB会で取り扱う。OB会で購入いただくと本体4,500円、送料込みで5,000円である。

この機会に是非ご購入をご検討下さい。
購入受付は南極OB会事務局です。裏表紙の

事務局案内までご連絡下さい。



英訳「南極記」



南極関連情報

極地研究所所長に白石和行氏

大学共同利用機関法人情報システム研究機構は、同機構教育研究評議会、藤井理行国立極地研究所長の後任として、国立極地研究所白石和行(しらいし・かずゆき)教授(63歳)を選考、2011年10月1日付で発令した。任期は4年。

白石新所長は北大大学院卒。14次冬、21次冬、25次夏、26次夏、31次冬副隊長、40次夏隊長、47次夏隊長を務めた。雪氷地学系。

しらせ出港

南極観測船「しらせ」(中藤琢雄艦長)は、南極へ向け2011年11月11日11時半、東京・晴海埠頭を出港した。オーストラリアのフリマントル港で第53次南極観測隊員や同行者を乗せ、同月30日南極へ向け同港を出港した。

「しらせ」の帰国は、4月中旬の予定。

5 3 次観測隊出発

第53次観測隊（山岸久雄隊長）隊員と同行者は、11月24日成田空港を出発した。25日にフリマントルで「しらせ」に乗船、30日に同港を出港、昭和基地に向かった。

53次隊は夏隊33名、越冬隊は石澤賢二越冬隊長以下31名、計64名。同行者26名。このうちセール・ロンダーネ山地の野外観測に夏隊員5名、「海鷹丸」での海洋調査に夏隊員3名、同行者10名が参加する。

山地地学調査隊も出発

第53次の別働隊である山地地学調査隊5名は、一足早く11月10日成田空港を出発した。昭和基地西方700kmのセール・ロンダーネ山地の野外地学観測と測地観測を行なっている。ケープタウンからチャーター機でノボラザレフスカ基地へ飛び、主としてベルギーの基地を拠点として観測を実施する。予定では2月21日までの約100日間。

海鷹丸による観測も実施

東京海洋大学の海鷹丸に夏隊員3名、同行者10名が参加。12月21日成田空港出発、フリーマントルで「海鷹丸」に乗船、

「しらせ」とタイアップした集中的な海洋観測を行い、二酸化炭素吸収による海洋の酸性化等に伴う海洋生態系の変化をとらえるための調査をする。オーストラリアのホバートに2月はじめに入港する予定。

「しらせ」難航、接岸断念

砕氷艦「しらせ」は厚い氷と例年以上の積雪のため、昭和基地に近づけない状況。このため12月23日、予定よりも少し遠い地点からヘリコプターで、第53次隊が昭和基地入りすることになった。しかし、この日はしらせ付近の天候が悪く、朝から飛ぶ予定だったヘリコプターがなかなか飛なかった。結局予定よりかなり遅れて、家族からの手紙や写真が入った「第1便（表紙写真参照）」が各隊員宛に届けられたが、楽しみしていた新鮮な野菜はおあずけとなってしまった。

なお「しらせ」はその後も難航し、今年1月24日現在昭和基地から約17km地点で接岸を断念、この地点に停留した。停留地点より昭和基地に空輸および雪上車による輸送を開始。接岸できなかったのは1994年の第35次以来で、新しらせになってからははじめてである。

停留地点の氷厚は5～6m、積雪71～135cmとのこと。この地点までにおけるラミング回数は流氷域で350回、定着氷域で2072回、合計2422回であった。

☆話題提供

TBS 特別番組『南極大陸』を見ましたか

柴田鉄治（7次夏、47次夏）

「史実と違いすぎる」「いや、ドラマなのだから…」とOBの感想は真っ二つ

みなさん、TBSの開局60周年記念特別番組『南極大陸』を見ましたか。OB会会報にテレビ番組の話題、それもドラマの話はちょっと場違いかもしれませんが、たまには脱線して、テレビドラマを取り上げてみてもいいでしょう。

2011年10月から始まって12月に終

わったこの特別番組、毎週日曜日のゴールデンアワーに一時間（最初と最後はもっと長く）という豪勢な枠で、TBSが局をあげて取り組んだドラマです。主演に人気抜群のキムタクこと木村拓哉を起用し、ほかにも柴田恭兵、香川照之、堺雅人、緒形直人ら錚々たる配役陣による豪華版なのです。

昔々、『南極物語』という映画がありました。観客動員数日本一をしばらく続けたほどの人気で、TBSの番組もそのリメイク版かな

と思いましたが、まったく違いました。ただ、ちょっと似ているところもありました。イヌが主役だということです。そして、イヌたちがなかなかの名演技だったことも。

あらすじを言えば、敗戦後のまだ貧しかった日本が南極観測に乗り出し、第1次観測隊が「宗谷」で南極に到達、オングル島に昭和基地を建設して、第1次越冬隊を残すことに成功。ところが、第2次隊は気象状態が悪くて越冬隊を送り込めず、そのまま基地に残されたカラフト犬のうちタロとジロが生きているのを第3次隊が発見するというのです。

こう言えば、史実をなぞっているように聞こえますが、細部は、まるで違っています。それはともかく、初回と最終回の視聴率は20%を超えたそうで、NHKの視聴者が選んだ「今年のテレビドラマ・ベスト10」でも第6位にランクされていました。TBSとしてはまずまずの成功だったとみているようです。



週間ザテレビジョン11月13日臨時増刊号より複写

ところで、このドラマを南極OBたちはどう見たのでしょうか。実は11月と12月の南極倶楽部などOBの集まったところでは必ずこのドラマが話題になり、やはり関心が高いのか見ている人が多く、大いに盛り上がりました。

私のみるところ、ひと言でいうと、意見は真っ二つに割れたようです。一方の意見は、あまりにも史実と違いすぎるというものです。とくに、ドラマの冒頭に「54年ぶりに明かされる真実!」という宣伝文句が入り、そこから始まる番組なのにひどすぎる、「あんな宣伝文句がなければまだいいのに」というのです。

主役のキムタクは、實在の第1次観測隊員の何人分かを合わせたような役柄であり、さらにいえば、南極観測を提唱した朝日新聞の矢田喜美雄記者の役まで兼ねていたのですからやむを得ないとしても、隊長や越冬隊長は、

どうしても実在した人物（永田武氏や西堀栄三郎氏）を知っているだけについて比べてしまうので、「違うなあ」という思いが一層つのるのです。

この意見の人たちの間で、ひときわ評判の悪かったところは、観測船「宗谷」が暴風圏を行くとき、船室まで水浸しになる場面です。「揺れのひどさは誇張してもいいけど、船室まで海水が入ってきたら船は沈みますよ」というわけです。

また、白夜のはずなのに、夜になったり、日の出があったり。さらには「白瀬隊の隊員だった父親がポツヌーテンを知っていたなんて、場所が違いすぎますよ」という専門家らしい指摘までありました。

これに対して、もう一方の意見は、ドラマなのだから史実と違って当然、番組の最後に「これはフィクションです」とお断りまで入れているのだからいいではないか。それより「いまの人たちに南極観測への関心を高めてくれるだけでもありがたいと思わなければ…」というものです。

とくに、当時の子どもたちが5円、10円とお小遣いをもち寄って南極観測を応援してくれたという事実や、昭和基地にカラフト犬を置き去りにせざるを得なかった事情などは史実に近く、そういうことをいまの人たちにわかってもらえるだけでも嬉しいドラマだということです。

この論争を私はただ黙って聞いていただけで、私の意見は何も言いませんでしたが、もし私の意見はと訊かれたら、こう答えるでしょう。「どちらかといえば、後者の『関心を高めてくれてありがたい』というほうですが、ただ一点、これだけは違うな、と強調したいことがあります。それは、南極観測が敗戦後の国民を元気づけたニュースではありましたが、ドラマが強調しているような国威の発揚、国家の威信を高めようとするものでは決してなかったということです。

「宗谷」の出航を見送る人たちが一斉に日の丸の小旗を振っている場面が違うと言っているわけではありません（実際は、朝日新聞社が宣伝用に配った社旗だったのですが…）。そうではなくて、南極の素晴らしさは、国境もなければ軍事基地もない、人類の共有財産であるところにあり、国威の発揚のためにとという解釈は、決してふさわしくないからなのです。



連載 支部便り⑩ (信州支部)

今回の支部便りは、白瀬南極探検隊100周年記念事業として行った信州支部と山陰支部の活動を報告します。

「白瀬南極探検隊100周年記念講演会・展示会」に取り組んで

荻無里立人（27W）

昨年1月にこの企画の実行委員長の井上さんとOB会記念事業委員会幹事長の渡辺元所長から相次いで丁寧なメールが来ました。内容は「白瀬百年講演会を信州支部で企画して欲しい」というものでした。早速、これを話題に支部の新年会を開いたのが1月21日でした。そこでは、「もしやるとすれば、50周年が長野だったので場所は松本、時期は子どもたちが夏休みになった頃」という大枠だけを確認しました。展示と講演会を同時に行うためには、そうした設備のある会場を確保しなければなりません。松本には「県の森文化会館：旧制松本高校（重要文化財）」という絶好の施設があります。新年会の席では他の話題で盛り上がりすぎてしまい、支部企画については「では、そこで」だけが確認されました。

3月に入り同会館に連絡をとって予約しようすると、講堂等は優先利用の団体で10月まで予約で一杯でした。また、他の松本市内の公的施設も同じような状況で、特に土日は比較的小さな会場も空いていませんでした。仕方なく隣接する塩尻市内の施設を探す中で総合文化センターを予約することができました。名称を「白瀬南極探検隊100周年記念講演・展示会」とし7月31日（日）に開催することにしました。講演は井上さんをお願いすることとし、展示物はしらせ記念館からお借りすることになりました。また、参加対象を子どもたちに絞り広報することにしました。

情報発信のためのポスターはプロジェクト委員会で全国7会場のものを作成していましたが、支部独自のものが必要との判断で作成することにしました。6月末には塩

尻市教育委員会の後援が決まり、ポスターとチラシを市内の高校とすべての小中学校の児童・生徒に配布しました。また、メディアでの広報はオブザーバーとして参加経験者のいる地元紙の信濃毎日新聞（以後信毎と表記）にお願いし、7月22日に全県版に記事が掲載されました。問い合わせはありませんでしたが、当日以降数件のメールがあり記事掲載の効果が確認できました。また、信毎の記事を見て中日新聞から取材の申し込みがあり、こちらは翌日掲載されました。



講演する井上さん

当日は支部の松沢さん、岡江さんそして実行委員会から山木さんと渡部さん、そして井上さんにも手伝っていただきパネルの準備から始めました。展示は当初会議室を予定していましたが、講演会場までのロビーを借りることができそこに展示しました。講演会場の講堂内にもパネルを展示し、講演を待つ間に見ていただくようにしました。午前10時過ぎには展示を見に来る人が訪れるようになり、中には白瀬南極探検隊のタペストリーを隅々まで読んでいる方もいました。講演会は予定通り午後1時に、野

村支部長のあいさつから始まりました。参加者は40名程でしたが、井上さんの講演に熱心に聞き入っていました。中に最後まで残って展示を見ていた中学生がいて「将来は南極に行って生物の観測したい」と言ってくれたのが印象的でした。このことは翌日の信毎でも報道されました。

講演会の参加目標を最低100人としていましたが、達成できませんでした。前回の50周年ではテレビ局にも告知を依頼しましたが、今回はそこまで手が回りませんでした。しかし、展示を見に来た家族づれの多くが学校を通じて配布したチラシを見ての参加であり、こうしたきめ細かな宣伝が重要であることが理解できます。また、

後になって市内の学校の先生から問い合わせがあり、南極観測については、子どもたち向けの情報発信を続けることの意義を実感する機会になりました。



講演会に参加された皆さん

☆ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

連載 支部便り⑪ (山陰支部)

白瀬南極探検隊 100 周年プロジェクト

大谷修司 (19W、41S)

白瀬南極探検百周年を記念して、南極OB会山陰支部が主催して講演会・企画展が2011年12月11日に鳥取県米子市文化ホールにて開催された。白瀬南極探検隊に鳥取県出身の西川源蔵氏(当時24歳)が糧食係として参加していたことから、今回の山陰支部主催講演会・企画展は鳥取県の米子で実施することとなった。

今回は講師として国立極地研究所名誉教授の小野延雄先生に来て頂き、また、白瀬南極探検隊記念館の石船清隆氏、加藤潤氏、秋田県企画振興部の渡部健氏が遠方より参加して下さった。来場者は約80名程度あり、年齢層は広く親子づれの姿もあった。

最初に白瀬中尉の人柄や白瀬南極探検隊の概要を参加者に知って頂くために南極OB会編の記録映画「南極記」を上映した。続いて小野先生には「百年前の南極探検」と題して、イギリスのスコット、ノルウェーのアムンセン、そして日本の白瀬中尉がともに同時期に南極点をめざしたことや、各隊の活動内容・成果を比較しながらわかりやすく紹介して頂いた。この中で、鳥取

県出身の西川隊員が白瀬隊の南極点を目指した隊とは別に、沿岸部で登山をしたことも紹介された。西川隊員が中腹まで登った山は日本の資料では未踏の山となっていたものの、アムンセン隊の隊員がすでに登頂していたことなどが外国の資料からわかった点を挙げられ、小野先生は日本以外の文献に広く当たる必要性を指摘された。また、アメリカのバードが自分で命名した南極の地名について、すでに白瀬が自分と同じ地点を大隈湾や開南湾と命名していたことを確認した後、白瀬が命名した地名に修正したことも紹介された。先人の仕事をきちんと分析評価するバードの姿勢を小野先生が語られたことが印象深く残っている。最後に昭和基地でのタロ・ジロとの再会の話題となったが、小野先生が3次隊夏隊で実際にタロ・ジロに会われた実体験に基づく話は参加者の興味をひいたようだ。

山陰支部からは2名が最近の南極観測について話題を提供した。まず、49次夏隊生物担当高橋哲也氏が「南極の自然環境と研究観測」と題して、高橋氏の研究テーマ

であったオゾンホールによる紫外線の増加と人工皮膚やペンギンの目に対する影響、南極氷床のでき方、昭和基地周辺の生物などを紹介した。続いて40次越冬隊の医療隊員大谷眞二氏が、「現在の越冬隊員のくらしと健康」と題して、隊員の生活面・健康面を中心に設営に関する講演を行った。世間の南極観測隊員のイメージは「高倉健」や「木村拓也」かもしれないが、実は近所にいるような人が隊員の真の姿であることが紹介され会場の笑いを誘っていた。

小野先生の南極氷を用いた実験では、空気の取り出し方や結晶の観察を実施したが、大人も子供も興味をもって身を乗り出して観察していた(写真1)。特に、氷の結晶が偏光フィルターの回転で色が変わるところは印象に残ったようだ。



写真1 小野先生による南極の氷を用いた実験に見入る参加者の皆さん

展示については白瀬南極探検記念館の渡辺氏と加藤氏に白瀬のパスポートの実物、提灯行列許可願いや開南丸の模型を持ってきて頂いた。やはり白瀬の自筆が入ったパスポートの本物は複製とは異なり、100年を超えて参加者の気持ちをわくわくさせてくれた。また、山陰支部の森本建司氏(28次越冬設営)によって鳥取市図書館に西川源蔵氏が所有していた南極記が保存されていることや、その中に陸軍大将乃木希典の名刺に赤字で「祝壮挙」と揮毫されたページがあったことも今回わかった。陸

軍大将が揮毫するほどの大きな国民の関心事であったことがこのことから伺われる。

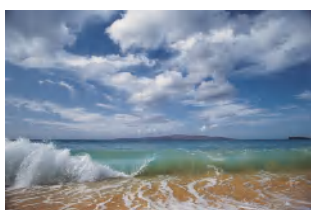
トピックスとしては、会場には白瀬探検隊に書記長として参加した「多田恵一」の子孫にあたる大林義明ご夫婦が、わざわざ岡山市から参加して下さい。近親者にしかわからないことが往々にしてあるが、多田恵一氏の読みは「タダ・エイチ」だそう。さっそく講演会終了後、白瀬南極探検隊記念館の石船さんたちは情報収集のため岡山の大林氏宅を訪ねられた。

イベント終了後は小野先生や秋田からの参加者を含めて、ささやかな懇親会が開催された。前山陰支部長である吉川暢一氏(10次越冬隊医療)御用達の居酒屋「陣屋」で地元名産の松葉ガニをつまみながらの宴席となり、講演会では語り尽くせなかった南極談義に花が咲いた。



写真2 小野延雄先生を囲んで南極OB会山陰支部のメンバーと記念撮影

今回のイベントを実施するにあたって、準備段階から南極OB会や白瀬日本南極探検隊100周年プロジェクト実行委員会には、貴重な資料の提供や資金援助等で大変お世話になった。講師をして頂いた小野先生、後援をして頂いた朝日新聞米子支局、NHK鳥取放送局、BSS山陰放送、新日本海新聞社、中海テレビ放送、鳥取県教育委員会、協力して頂いた国立極地研究所、当日の運営にご協力頂いた日本山岳会山陰支部の遠藤さん、佐藤さんにお礼申し上げる。





連載「帰国後の各隊の動き」

第24次隊帰国後の活動報告

大久保栄治（24W）

第24次隊の同窓会が去る11月12日（土）東京台場、ホテルグランパシフィックで開催された。越冬隊、夏隊、オブザーバー全47名中37名参加の大盛会であった。24次隊は越冬中、「余裕の24次」をモットーに淡々と任務を遂行してきた。ところが帰国後はそれぞれの仕事に専念していたため（？）全員集合の機会はなかった。晴海を「ふじ」で出港してから30年目の今回がなんと初めての同窓会であった。帰国後南極への再度、再々度と渡航した隊員は18名を数え、24次以降8回も参加した隊員もいた。歓送会などはその都度集まれる者が催していたが、全員集合の機は熟していなかった。今回、隊員の平均年齢が60歳を越え、最長老の年齢も考えると、全員が元気な内に一度顔を合わせておこうということで、満を持して集まったのである。今まで同窓会がなかったのは隊員間の不仲という訳では決して無いのである。ただ、面倒くさがり屋が多い隊であったのは否めず、今回も、まだ現役の若手は仕事都合でやむなく欠席の者も何名かいたが、中には「面倒くさいからな～」と欠席した者もいた。



早く真ん中に集まれ！

同窓会は、奇しくも前日に53次隊の「し

らせ」が通過していったレインボーブリッジを眼下に望む会場で、名司会者の志賀重男隊員の開会宣言で始まり、北海道からわざわざ参加してくれた前晋爾隊長の越冬当時と変わらぬ余裕を漂わせた挨拶、山形から参加してくれた元気あふれる最長老の高橋永治隊員の音頭による乾杯、集合写真撮影と続き、その後は矢野隊員が撮影した24次隊の昭和基地の動画をスクリーン上に流しながら約1時間歓談。およそ30年ぶりの再開となる隊員も多く、昭和基地と同じようにかなりの変貌を遂げている隊員も何名かいたが、直ぐに違和感なく再認識された。会場は、そこここに談話の輪がひろがり、笑顔と、歓声があふれていた。



全員集合

会の後半は各部門ごとに壇上に上がり、隊員が一人ずつ挨拶をした。近況報告もあれば、時効となった今だから話すという越冬中の秘話まで飛び出し、会場は笑顔、笑顔、笑顔。合間に神田啓史隊員による当時のスライドを上映しながらの24次隊の Kou-seki（航跡？功績？）発表もあり、会場の空気はまさに昭和基地での全員集合。

今回集まった隊員は50代後半から80歳過ぎまで、平均年齢は61歳であった。

各人の挨拶を聞いていると、ほとんどの隊員にとって南極行きは生き方に大きな影響を与え、人生の重要な構成要素となっていた。

なお、同窓会の前日、石沢賢二隊員が53次越冬隊長に急遽ピンチヒッターとして決まり、会は石沢隊員の歓送会も兼ねることとなった。石沢隊員が挨拶で意気込みを披露した後、馬場廣明隊員の音頭で皆から53次隊の無事越冬祈願のエールが贈られた。

最後は、やはり馬場隊員の発声のもと3本締めでお開きとなった。あつと言う間の3時間、全員で30年前にタイムスリップの同窓会であった。

1次会終了後も熱気は冷めやらず、宿泊予定の客室にて2次会。製氷室などのサービスエリア対面に3部屋続きで部屋を確保しておき中央の部屋を宴会部屋に使用。ツウインの部屋に20名弱が所狭しと座り込み、水割りを飲みながら思い出話にひたる。ここは内陸棟か？居カブか？アルコールの回った頭はタイムスリップを通り越しトリップ状態となっている。それでも24次隊たる芯は外さず、11時前に帰宅グループは潔く帰宅の途につく。

残った宿泊予定者11名はさらに12時過ぎまで静か（比較的）に飲み、南極への、24次への思いを語る。29年ぶりの24次隊・昭和基地であった。



新刊紹介

小島敏男著「しらせ 南極観測船と白瀬轟」

（成山堂書店、2011年6月10日発刊 税込み2,940円）

およそこの10年は日本の南極観測船には苦難の連続であった。

初代「しらせ」の引退にともない後継船の計画が開始されるが、建造のための予算獲得の難航と余儀なくされた計画の変更、着工するも命名にも紆余曲折があった。そして、いよいよ新観測船「しらせ」が就役して第51次南極地域観測協力行動として南極への初航海を行うわけだが、しかしこの初航海でも近年稀にみる厚い多年氷に行く手を阻まれ苦闘の日々を送り、なんとか昭和基地接岸を果たすのである。

本書ではこれらの経緯について、多種多様な資料や記録を引用しつつ、諸所丁寧に記述されている。特に苦難の初航海については、東京晴海ふ頭の出航から丹念に日を追った記録としてまとめられており、読者はその航海を俯瞰することができるだろう。そして、各ポイントにおいて撮影された幾葉ものカラー写真は無言ながら雄弁な解説となり、B5版と紙面の大きな本書における特色となる。

一方、初代「しらせ」も退役後に係留公開されるに至るまで一筋縄にはいかなかった。

退役に先立ち引き取り先を募るも地方公共団体も民間も適切な引き取り先がなく、一時は保存が断念され解体されることが決定されるも、鉄スクラップ市場の価格の下落により、逆転の復活保存、晴れて「SHIRASE」としての係留公開となるのである。

この初代「しらせ」の退役後の公開についても、本書では丹念に経緯を追いかけており、さらには無事引き取り先が決定したのち、実際に横須賀から送り出され、そして「SHIRASE」として生まれ変わるまでを、読者は本書の上で立ち会うことができるのである。

そして、初代「しらせ」の現役時代のさまざまなエピソードが、その誕生からビセットされた砕氷船を救助した活躍やひと度の接岸断念にいたるまでわけへだてなく紹介されている。さらには後継船建造着手の遅れから備船を余儀なくされた第50次観測隊の「オーロラ・オーストラリス」での輸送についてまできちんと触れられている。

そして、南極観測船「しらせ」という名称の元となる白瀬氷河の由来である「白瀬轟」。

彼の100年前の南極探検隊もまた苦難の連続であった。その南極探検そのものについてはもちろん、探検隊出発までの準備と探検後に残った困難を含め本書では同様に細やかにまとめられている。
時期をたまたま近くした現代の白瀬南極探検

隊100周年のイベントと南極観測船「しらせ」の新旧交代とをここに並びたせることで、そこに共通する名前とともに困難に打ち勝つ物語があることを思わざるを得ない。

(藤田 建記)



訃報

近藤典弘 2011.11.31 宗谷5次、6次
宮地房幸 2011.11.26 宗谷1次、2次

佐藤金雄 2011.12.14 13次夏、設営
菊地時夫 2012.01.14 26次冬、雪氷
増田光男 2012.01.19 24,27,30,32,35,36
各次夏、40冬 設営

*** 広報委員会からのお知らせ ***

○南極OB会会報もあっという間に15号を迎えました。15号ともなってきましたと広報委員の編集員はマンネリ化を懸念します。会報は会員全員のコミュニケーションの場として出発しています。偏ったものになってはならないと注意を払いながら毎号を編集していますが、そうすると通り一遍の記事になって面白さや特色を失います。編集者はその加減を注意しながら編集していますが知らず知らずのうちにこの誓約を自ら破っているかもしれません。何かお気づきの点があれば忌憚無い意見、お叱りをお寄せ下さい。職域、年代を飛び越えた絆を結んでゆきたいと考えています。

○第9回「南極歴史」講話会の案内

3月31日(土) 14時～16時、村越 望さん、渡辺清規さんによる宗谷時代のお話を予定しております。詳しくは折込のご案内を見ていただき、ふるってご参加ください。場所は日本大学理学部1号館133号教室です。

○2011年度の通信費の振込みを、よろしくお願い申し上げます。

この会誌は皆様からの通信費で運営されています。記事作成や記事集め、編集等はもちろんボランティアおこなっていますが印刷費や送料は費用がかかります。まだ通信費を収めてない方は納めて下さい。通常は5月発行の会報でその年度分の会費納入をお願いしています。今年度分を収めたかどうか分からなくなった方は下記の事務局までお問い合わせ下さい。電話でのお問い合わせは水曜日と金曜日の午後をお願いします。できるだけメールかFaxをお願いします。

南極OB会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田2-3-2 牧ビル301
電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635
E-Mail Address : nankyoku-ob@mbp.nifty.com
南極OB会ホームページ : <http://www.jare.org/>
